

# *Acta Epsilonica*

Online First, Pages 1–2.

Received: January 26th, 2016, Accepted: February 7th, 2016.

## いつか言葉を越えた世界へ行くために

佐々木惟子

以前, Epsilon で, 瑕疵担保責任を例に法律の解釈のしかたを説明したが, 実務家というのは, 現行の一般的な解釈論に従った上で, 今日の前にある紛争の解決にあたり, ある証拠からどのような事実が認定できるか, その事実を要件との関係でどのように評価することができるか, という「事実認定」と日々格闘している(現行の解釈論の是非は, 研究者におまかせすることが多い). 事実認定は, 経験則に基づいてなされるものであるから, 法曹でなくとも無意識になされている. 例えば, 屋内から外にでたら地面が濡れていたことから, 雨が降ったのだろう, と考える, というのも立派な事実認定である. 弁護士や検察官は裁判官を説得するため, 裁判官は判決を読む国民を説得するため, 雨の例で言うなら, 地面が濡れているとなぜ雨が降ったと考えられるか, も言語化していかなければならない. 法律っぽい例を挙げるなら, 事件で誰かに盗まれた物を被告人が持っていた時に, 被告人がその物を盗んだといえるか, それはなぜか, を言語化していくのである(ちなみに, この議論は近接所持の法理というものである).

実務家一步手前の司法修習生は, この事実認定に日々励んでいる. 私も例外ではない. そんな, 自分の中で当然の前提となっているような事柄を言語化する日々の中で, 学部時代にある決意をしたことを思い出したため, その決意について, 文章を綴ることにした. 決意とは, あらゆる事象, あらゆる感情について, 言語化を怠らない, というものである.

高校の時, 大学受験の現代文の問題で言語論は頻出のテーマで, 「言語が意思疎通の道具であると同時に, 自身の認識と思考の道具でもある」といった内容の論説文を読んだ方も少なくないと思う. 言語の前者の機能は, 万人に親しみやすいもので説明を要しないが, 後者の機能について確認的に説明するならば, 私たちが対峙する「世界」の一部を言語化することで, 言語化した一部が「世界」から切り取られ, 私たちは, 初めて, 他と区別して, 対象を認識することができる, という話である. 言語化できないものは, どこまでも曖昧で, 自身の中でふわふわと漂う霞のようなものになってしまう.

私が常に言語化を心がけている 1 点目の理由は, 対象の認識, 正しい理解のためである. 例えば, 春に桜を見て, 美しい, としか表現できないのでは, 他の花と異なる, 桜の真の美しさを理解できていないと思うのだ. 徐々に暖かくなっていく中, たくさんの花を咲かせて春の訪れを告げたかと思うと, 風が吹くだけでその小さな花びらがはらはらと舞い落ちる, その儂い刹那的な美しさが桜の魅

力ではないだろうか。悲しみに暮れる時は、悲嘆の原因にしても、その感情自体にしても、言葉で表現することである程度了解可能となり、意味のわからない苦悩から脱しうる。「文学は不幸の木に咲く」とは、よく言ったものだなと感心する。

ナンダソナコトカと思われるかもしれないが、特に感性など心の動きの言語化は大変困難であると常々思う。この難しさは言語化の当然の帰結であると考えている。言語というのは抽象化されていて、他方、感性は個々人によって多種多様で限りなく具体的なものであるから、言語化の過程で捨象した部分が多いほど、乖離が生じてしまう。つまり、捨象する部分が少なくなるようなより適切な表現を選ぶ必要があり、豊富な語彙が必要となる。

言語化を心がける2点目の理由は、もちろん、言語の一般的な機能の意思疎通のためである。言語が抽象化されたものであるからこそ、他人に自分の認識を理解してもらい、感情を共有することができる。悲しみも、言葉で他人に伝え理解を得ることで、自分は一人ではないと、勇気付けられ、立ち上がることができるのだと思う。人の喜びを言葉で聞くことで、まるで自分のことのように感じられ、同じように笑顔になるのだろう。

言語化を心がける、最後の、それでいて最も重要な理由は、ここまで言葉で表現することの重要性を主張してきたことと矛盾するように聞こえるかもしれないが、言葉を超えた感情を探求するためである。前述の通り、言語は具体を捨象してしまうものである以上、この世界には、どんなに言葉を尽くしても表現できない心の動きがあると、私は思っている。今まで生きてきて知った言語では伝えられないほどの、衝動のような感情の揺れ(幸福感や感動などプラスの方向性の揺れ)があった時、そして、その感情を言葉にしなくとも、自分以外の誰かと分かち合うことができた時、どんなにか幸せだろう。感性の共鳴だ。

そんな、言葉を超えた感性の共鳴を追い求めて、私は日々言葉を知り、言語化を試みる。経験則を言語化し、感情を言語化する。逆説的だが、いつか言葉を超えた世界へ、感性の共通する他者と行くために。

■あしがき 拙い文章ですが、賛同者がいらっしやると嬉しいです。また、この文章はあくまで essay で、この文章で用いられている「認識」は特定の学問における用語を意味するものではありません。